

学生の手で 被災した農村を 持続する地域へ

宮城県仙台市若林区 一般社団法人 ReRoots



ReRoots のメンバー

東日本大震災と ReRoots のはじまり

2011年3月11日。仙台市の川内コミュニティセンターに避難し、自発的に避難所運営のボランティアを始めた大学生たちが ReRoots の母体となった。避難所運営ボランティアが落ち着くと、学生たちは無我夢中で津波被災地のボランティアに携わり、被災者のこれからの生活を考えたとき、がれき撤去だけでなく被災者の生活を回復するまでの長期的支援が必要だと考えた。

「復旧から復興へ、そして地域おこしへ」のコンセプトを創出し、津波被災というマイナスから、農業とコミュニティを再生する若者の挑戦が始まった。

3年間におよび地道な復旧支援活動

2011年7月16日、ReRoots 若林ボランティアハウスを設立。全国各地からボランティアを受け入れ、農地のがれき撤去をスタートさせた。農家は家屋の被災だけでなく、職場である農地も被災しているため生活再建の道のりは長い。

がれき撤去の支援が終了したのは3年後の2014年3月。累計約3万人に及ぶボランティアを受け入れ、関係農家は150軒以上、依頼案件は約500件にのぼった。

農家・住民と共同で復興の道を歩む

がれき撤去が終われば、多くのボランティアは撤退していったが農業も住民の生活も元通りにはならない。農機具も失った中で営農再開、1500世帯から500世帯に激減する中でコミュニティ再生、失われた景観の再生と地域課題は山積していた。ReRoots の学生たちは、農家や住民を一軒一軒訪ね歩き、問題を調査して復興期の活動の創作がはじまる。

農家や住民たちが主体的に地域の復興を成し遂げるポイントは、「農業の再生なくして農村の再生はない」ことにある。町内会や農家と共同で、地域の豊かな農業や自然環境、江戸時代から続く農村が培ってきた食事や、行事の文化



農作業の様子



わらアートオープニングイベント

を活かし、地域をトータルにデザインする取り組みが求められた。

遊休地をお借りした「ReRootsファーム」の運営では、農家の指導を受けながら学生自身が野菜作りに取り組む。若者が農業に触れることと自体が珍しく、農家の営農意欲を引き出すと共に、農家を志す学生も生まれてきた。累計5名の新規就農者を輩出し、そのうち2人が若林区の若手農家として活躍している。

せっかく営農再開しても販路形成が問題であり、仙台市という大消費地の近郊であることを活かした販売活動も継続して行う。都市部のアンテナショップとしての「若林区復興支援ショップ」りるまあと、「移動販売を行う「若林区とれたて野菜おとどけショップ」くるまあと」には1年間で約1200人のお客さんが訪れた。さらに、飲食店や地域の福祉施設と関係ができており、沿岸部の農業地域と、消費地を面としてつなげた地産地消を促す。



スイートポテト製造

コミュニティ再生において特徴的なのは「せんだいわらアート」だ。復興のシンボルである稲わらを農家から提供していただき、最大6メートルの巨大な恐竜や動物のオブジェの制作に取り組む。田植えから収穫、わらアート制作・展示まで1年を通じたパッケージ企画であり、昨年は約7万人が来場する人気で、農村地帯では有数の集客力をもって被災地への往来を創る。

復興から地域おこしへ

もうすぐ東日本大震災から10年の節目に差し掛かる。行政の進める農業の大規模化、法人化による営農再開や住民の生活再建も進んだ。一方で、農家の平均年齢は67歳を超え、後継者不足と津波被災による急激な過疎化、高齢化率が40%を超える集落もできており、高齢化の一途を辿る。せっかく復興を成し遂げた若林区の未来は、限界集落の危機に直面しており、

ReRootsの新たな挑戦がスタートしている。

一つは「株式会社仙台あぐりる農園」の設立。ReRootsから新規就農した農家が立ち上げた農業生産法人であり、目指すのは地域の生産法人や農家と協力し、新規就農者の獲得と地域への定着を行う農村塾づくりだ。安心、安全な農作物をつくりながら、若手農家とのグループづくりや生産法人と連携して、農家自身が農業の未来を切り拓く。

二つ目に、令和2年6月にスタートした「仙台いも工房りるぽて」のスイートポテトの加工、販売プロジェクトだ。さつまいもの生育体験企画である「おいもプロジェクト」は年間150名程が参加する人気のイベントであり、収穫したさつまいもを活かし、地元の洋菓子店のレシピを継承して店は誕生した。素材の自然な甘みを活かしたスイートポテトは大人気であり、内陸部に構えたお店には行列が絶えない。震災復興から若林区沿岸部の魅力を発信するアンテナショップとして、地域内外を結ぶ役割を果たしつつ、加工、販売体験の企画も計画して、農村ツーリズムとしても発展させ、「いもづる式まちづくり」を目指す。

ひなびた農村として若林区が10年、20年先も持続できる地域づくりに向け、地元のプレイヤーとして溶け込み、ReRootsは地域おこしの新たな挑戦をスタートしている。

(一般社団法人 ReRoots 渉外担当 石井香帆)